

今井原（一）

中島八十一

（一）今井原のオホイヌノフグリ

善光寺平は長野市の平地部分にあたる南北二十キロ、東西十キロの盆地の通稱なり。山々に圍繞せられ、東に菅平、北に戸隠、西にアルプスを望む。

今井原は川中島の古戦場に隣接し盆地の一角を占むるも、これを明白に區分せる川または岡を見ることなし。今井四郎兼平なる武將の墓の原真中に立ちて、木曾義仲に従ひて京に上り、近江で討ち死と説明あれば、今井の名はさらに古に遡らむ。標高四百メートルの土地にては三春を迎ふることなく、梅、桃、櫻は時期をいくばくか違へて咲けり。四月初頭、今まさに川中島桃の花が咲かんとするところなり。この桃はこの地にて五十餘年前突如として出現せし變異種なればその名に土地の名を冠せり。格別なる甘みの故に珍重すべきなるも結實遅く八月末なれば中元に遠く間に合はざるに加へ、果肉固ければそのまま食する者よほどの數寄者なり。この味覺を惜しむ者ありて交配種を作り出し、今や全國に移植せられ、知らず知らずのうちにその遺傳子をもつ桃を食む者多し。かかる傳聞は、この數年來、大學の講義をするに週のうち二日か三日を今井原にて過したれば耳に入りたることなり。その週日にありて、晝休みといへば外歩きを習慣とし、原のマイクロなる點にては誰よりも詳しくなりけり。まづへび。歩き回る縦二キロ、横一キロの範圍内に一メートル近いシマヘビ二匹を數ふ。種類は實物を視認し、數は脱皮の際の抜け殻を數へたり。次いでヒト。人數を數ふることなきざるも大多數は農民にて、ドイツの木造建築さながらに白き壁面に縦横の木組みによる幾何文様美しき家に住めり。一家それぞれにトラクターと大型の消毒車を持ちて、共同作業は絶えてなきざれば、他人の田畑につきて質問するに全く要領を得ざるほどに個人的日々を送る。野に咲く花は關東平野にほぼ同じ種にて、開花時期のいくらか遅るるは氣溫の故なり。その中にありて最も余の目を惹きたるはオホイヌノフグリなり。次なるはタンポポ。兩者何故なりや年がら年中目にしたり。無論多く目にする季節ありたれば、片や探してやうやく見付く季節のあるは理なり。いづれも春先に開花最盛期を迎ふれば開花の周期は同じと見たり。ある冬、さして深くもなき雪の積りたるに、オホイヌノフグリの雪下に數多咲き誇るに仰天す。關東平野にてまづ見ることなき光景なり。爾來オホイヌノフグリとタンポポを外歩きの折に必ずや探すことにしたり。タンポポは印象通りに早春から咲き始め、初夏に開花のピークを迎へ、その後花の時期は緩慢に續く。嚴冬の一月、二月は花を見ることなきこと確認す。他方、オホイヌノフグリは十月ごろ新しき葉の出現を見、十一月の聲を聞けば新しき葉に付く花の開花を見る。新年

を迎ふれば咲く花は誰の目にも明らかにて、雪下の花盛りにつなげり。その際タンポポの花を見ることなし。二月、三月と花は増え続け、四月には田畑に青絨毯を敷き詰めたりや紛ふ景色となる。かくのごときはウイキペディア他にも書きたることなり。書かれざるは、たとへわづかなりといへどもオホイヌノフグリの花を全く見ざる月はなしといふことなり。通年で開花を見るとは新見なり。何分にも農家は草刈りに熱心にて除草剤も蒔く。花少ない時期は探すに相當に熱を入れる必要あり。水路に落つること一度、田んぼに落つること一度。泥靴にて大學に戻りたるに面と向かひて揶揄する者皆無。

(令和三年三月二十八日受附)